

日本人・アメリカ人の縦型／横型—個人主義／集団主義

—日米差と世代差について—

大橋理枝¹⁾

Vertical/Horizontal—Individualism/Collectivism of Japanese and American Respondents

—Differences between countries and generations—

Rie OHASHI

ABSTRACT

Horizontal/Vertical-Individualism/Collectivism Scale developed by Singelis, Triandis, Bhawuk, and Gelfand (1995) was administered to Japanese and American college respondents and their parents. When students and parents' data were pooled, U.S. American respondents scored higher in vertical collectivism, horizontal individualism, and horizontal collectivism scales. When Japanese and American respondents' data were pooled, university student respondents scored higher than their parents in vertical individualism scale. When the two generations were analyzed separately, American university student respondents scored higher than Japanese university student respondents in all scales, whereas American parent respondents scored higher than Japanese parent respondents in horizontal individualism and horizontal collectivism scales. When the two generations were compared within each country, Japanese university student respondents scored higher than their parents in horizontal collectivism, whereas American university student respondents scored higher than their parents in vertical collectivism scale. When ANOVA was conducted on the four scales respectively with generational difference and national difference as independent variables, interaction between the two independent variables was found only in the horizontal collectivism scale. Although no definite conclusion can be drawn from this study due to the insufficient number of participants, these results, taken as a whole, challenge the "common understanding" that Americans are individualistic and Japanese are collectivistic people. Whether such results were obtained because of particular social circumstances under which this study was conducted, or whether it is because the "common understanding" is no longer an accurate description, is yet to be determined in future studies involving more number of participants.

要旨

Singelis, Triandis, Bhawuk, 及び Gelfand (1995) によって作成された縦型／横型—個人主義／集団主義尺度を用い、日本人大学生及びその親とアメリカ人大学生及びその親に質問紙調査を行った。その結果、子世代と親世代を分けずに日米比較を行った場合、縦型集団主義・横型個人主義・横型集団主義尺度ではいずれもアメリカの調査協力者の得点の方が日本の調査協力者の得点よりも高かった。また、日米を分けずに世代間比較を行った場合、子世代の方が親世代よりも縦型個人主義尺度の得点が高かった。世代別に日米比較を行うと、子世代では全ての尺度でアメリカ人の調査協力者の得点が日本の調査協力者の得点を上回ったが、親世代では横型個人主義尺度及び横型集団主義尺度においてのみ、アメリカ人の調査協力者の得点が日本の調査協力者の得点よりも高かった。一方国別に世代差を比較すると、有意差がみられたのは日本では横型集団主義尺度のみ、アメリカでは縦型個人主義尺度のみであり、いずれも子世代の得点の方が親世代の得点より高かった。4つの尺度それぞれを従属変数とし、国別と世代別を独立変数として分散分析を行った結果、交互作用が有意に見られたのは横型集団主義尺度のみであった。調査協力者数が少なかったために、この調査から確定的な結論を出すことは不可能であるが、「アメリカ人は個人主義的、日本人は集団主義的」とされる「了解」に反する結果が出た理由をはっきりさせるためには、今後更に多く

¹⁾ 放送大学助教授（「人間の探究」専攻）

の調査協力者からデータを集め、期を改めて再度調査を行う必要があると思われる。

I. はじめに

異文化間コミュニケーションというのは、「ある者が自己文化内で獲得した対人コミュニケーション行動についての知識を用いて、他の文化の者とコミュニケーションする際に生ずる問題点や解決法、コミュニケーションのメカニズムなどについて研究する分野」(西田, 2000, iii~iv)である。つまり、文化的背景が異なる者同士がコミュニケーションを図ろうとする際に何が起こるか、どのような理解・誤解が生じるかを研究する分野であるといえる。ところが、文化的背景の異なる者同士がコミュニケーションを図ろうとする時、その場にはそれぞれの参加者が自分の文化背景の中で培った価値観やコミュニケーション方法を持ち込むことになると考えられる。そこで、ある文化ではどのような価値観を重視しているのかを研究したり、ある特定の文化背景を持つ人達がどのようなコミュニケーション方法を共有して意思疎通を図っているのかを研究したり、ある文化で共有されている価値観やコミュニケーション方法を他の文化で共有されているものと比較することも、異文化間コミュニケーション分野の研究対象とされてきた。本論もそのような異文化間コミュニケーション分野の研究の流れを汲むものである。

異文化間コミュニケーションの分野で、日米の比較研究は最も頻繁に研究対象とされてきたといっている。その研究の歴史の古さもさることながら、今までに行われてきた日米比較研究の数だけを単純にみても、他の文化との比較研究の数に比べればはるかに多いと言われている。その日米比較研究の歴史の中で最も頻繁に利用されてきたのが、集団主義と個人主義という概念である。桜木(1997)によれば、「個人主義と集団主義は多くの研究者によって、コミュニケーション行動における文化の違いを説明する上で最も重要な文化側面の一つであると考えられている。この文化側面は個人の目標及び集団の目標のどちらを優先するかということを問題にしており、個人の目標を優先する傾向がある文化は個人主義文化と呼ばれ、集団の目標を優先する文化は集団主義文化と呼ばれる」(p.241)。この分野における数多くの日米比較の研究結果から、「多くの研究者達が、アメリカは個人主義的な文化であり、日本は集団主義的な文化であるという点で合意している」(Gudykunst & Nishida, 1994, p.26: 訳は筆者)とされ、このことは異文化間コミュニケーションの分野では既に「了解」されたことになっている¹⁾。

個人の利益を優先させるか集団全体の利益を優先させるかという点が様々な文化で異なるということ自体はかなり古くから言われていたことではあったが、そ

れを個人主義—集団主義という尺度で概念化したのは Hofstede の研究が最初だったといえる。彼は、50カ国のIBM社員に勤労観に関するアンケート調査を行い、その結果から文化を比較する際に有効な4つの価値観を抽出した(Hofstede, 1983)。「権力格差(power distance)」、「不確実性回避(uncertainty avoidance)」、「男性的価値観/女性的価値観(masculinity/femininity)」と名づけられた尺度に並んで抽出されたのが「個人主義/集団主義(individualism/collectivism)」であった²⁾。

この概念はその後、様々な研究者によって解説され、利用され、批判され、修正されてきたが、その後のアメリカを中心とした異文化間コミュニケーション分野の研究の展開の中で、大きく分けて三つの概念が派生した³⁾。一つ目は、もともと文化的な価値観を比較する概念として提言された個人主義/集団主義を個人レベルの価値観に応用した「他者中心/自己中心(allocentric/ideocentric)」という概念であり、Triandis、Leung、Villareal、及びClack(1985)によって提唱されたものである。二つ目はそれをさらに発展させたような、MarkusとKitayama(1991)によって提唱された「自他関係規定(self-construal)」という概念であり、各個人が自分と他人との関係を独立的(independent)であるか依存的(interdependent)であるかによって自己意識や他者との関係に影響があるとされた。そして三つ目が、Singelis、Triandis、Bhawuk及びGelfand(1995)による「縦型/横型—個人主義/個人主義(horizontal/vertical—individualism/collectivism)」であった。この概念は、従来の個人主義/集団主義の次元に、他人との間の競争や格差を容認するかしないかという次元を交差させたものであり、他人との競争を厭わずに個人の利益を優先させる「縦型個人主義(vertical individualism)、他人との格差を容認し、個人の都合を犠牲にして集団の利益を優先させる「縦型集団主義(vertical collectivism)、個人主義的ではあっても「出る杭」となって打たれることを避けたがる「横型個人主義(horizontal individualism)、そして他人と横並びであることを重視する「横型集団主義(horizontal collectivism)の4種の価値観があるとされた。Singelis、Triandis、Bhawuk及びGelfand(1995)は、縦型個人主義の代表としてはアメリカやフランスを、縦型集団主義の代表としてはナチスやインドの伝統的な農村社会を、横型個人主義の代表としてはオーストラリアやスウェーデンを、横型集団主義の代表としてはイスラエルのキブツ社会を挙げているが、日本も「横型集団主義というよりは縦型集団主義に近いと思われる」(p.246)と述べられており、「正しい言葉遣いをするためには話者の相対的な立場の上下を知ることが重要である」(p.246)ことがその根拠

とされている（いずれも訳は筆者）。

本論では、このSingelis、Triandis、Bhawuk及びGelfand（1995）によって作成された「縦型／横型個人主義／集団主義尺度」を用い、日本人の学生とアメリカ人の学生及びその親にアンケート調査を行い、日本人とアメリカ人の違いと、世代差による違いを調べることにより、従来から言われてきた「日本人は集団主義的、アメリカ人は個人主義的」という「了解」が、縦型・横型という次元とどう関わるのかを検証することを目的とした。

II. 調査方法

2001年の秋から2002年初頭にかけて、アメリカのミシガン州立大学の学生36名と、日本の東海大学の学生47名、及びその親（ミシガン州立大学の学生の親33名、東海大学の学生の親42名）にアンケート調査を行った。Singelis、Triandis、Bhawuk及びGelfand（1995）によって作成された「縦型／横型個人主義／集団主義尺度」（縦型個人主義尺度8項目、縦型集団主義尺度8項目、横型個人主義尺度8項目、横型集団主義尺度8項目、いずれもリカート式尺度）を筆者が和訳したものを日英語バイリンガルに英訳してもらい、原文と齟齬を生じた部分を修正した上で、「縦型／横型個人主義／集団主義尺度」の日本語版を作成した⁴⁾。基礎統計資料（調査協力者の年齢層、性別など）を尋ねる項目や他の尺度項目と共に「縦型／横型個人主義／集団主義尺度」を入れ⁵⁾、日本人の大学生・アメリカ人の大学生に回答を求めると共に、同じ質問項目を入れたアンケート（基礎統計資料に関する項目のみが異なるもの）を渡し、父親又は母親に回答してもらうように依頼した。調査参加者の基礎統計資料を、付録aに示す。

III. 結果

1. 利用尺度の項目の確定

調査項目に含まれていた縦型個人主義6項目、縦型

集団主義8項目、横型個人主義8項目、横型集団主義8項目は、理論上それぞれが同一因子に属していなければならない。従って、この4つの尺度それぞれについて確認的因子分析（confirmatory factor analyses）を行い、同一因子に属さない項目を除いた結果を利用尺度項目とした⁶⁾。確定的因子分析を行う際にはPACKAGEプログラムを用い、付随機能である因子モデルのあてはまりの良さに対する検定結果を利用して項目を確定した⁷⁾。その結果、縦型個人主義尺度に4項目、縦型集団主義尺度に5項目、横型個人主義尺度に5項目、横型集団主義尺度に6項目が残る結果となった。各尺度の項目及び因子モデルのあてはまりの良さは、付録bに示してある。

各尺度に属する項目数が異なることとなったので、各尺度に属するそれぞれの項目の得点を足したものをその尺度の項目数で割った（つまり全ての尺度の最高点が7、最低点が1で統一されるようにした）数値を、最終的なその尺度の得点とした。

2. 各尺度の日米比較及び世代間比較

各利用尺度について、子世代と親世代のデータを合わせたものを日米間で比較した結果を表1に示す。驚くべきことに、アメリカがその代表とまでいわれた縦型個人主義の尺度では日米間に有意な違いは認められなかった。更に、日本の方がアメリカよりも強いであろうと思われた縦型集団主義の尺度ではアメリカの調査協力者の方が日本の調査協力者よりも得点が高かった。個人主義的であるといわれているアメリカの方が日本よりも横型個人主義尺度の得点が高かったのは頷けるが、集団主義的であるといわれている日本の方がアメリカよりも高いと予想された横型集団主義尺度でも、アメリカの調査協力者の得点の方が高かった。

一方、日米のデータを合わせたものを世代間で比較したところ、世代差が見られたのは縦型個人主義尺度においてのみであり、子世代の方が親世代よりも得点が高かった。他の尺度については有意な世代差は見られなかった。（表2）

世代を分けて比較してみると、子世代では全ての尺

表1 各利用尺度における日米比較（子世代・親世代を合わせたデータを用いた分析）

	日米	度数 (N)	平均値 (M)	標準偏差 (SD)	平均値の標準偏差 (SE)	t値・自由度	有意確率 (両側)	平均値の差 (米-日)	差の95%信頼区間 (下限/上限)
縦型個人主義	日	87	4.01	0.93	0.10	1.20*	.234*	0.21	-0.14/0.56*
	米	67	4.22	1.18	0.14	123.11*			
縦型集団主義	日	88	4.19	0.88	0.09	2.21	.029	0.34	0.04/0.63
	米	67	4.53	1.01	0.12	153			
横型個人主義	日	86	4.48	0.72	0.08	11.74	.000	1.39	1.15/1.62
	米	65	5.87	0.72	0.09	149			
横型集団主義	日	87	4.61	0.65	0.07	10.57	.000	1.14	0.93/1.36
	米	66	5.75	0.68	0.08	151			

*は等分散性を仮定しない検定法による検定

表2 各利用尺度における世代間比較（日米を合わせたデータを用いた分析）

	世代	度数 (N)	平均値 (M)	標準偏差 (SD)	平均値の標準偏差 (SE)	t値・自由度	有意確率 (両側)	平均値の差 (子-親)	差の95%信頼区間 (下限/上限)
縦型個人主義	子	82	4.29	0.98	0.11	2.36	.019	0.39	0.06/0.72
	親	72	3.90	1.09	0.13	152			
縦型集団主義	子	82	4.27	0.90	0.10	-0.90	.368	-0.14	-0.44/0.16
	親	73	4.41	1.00	0.12	153			
横型個人主義	子	80	5.17	0.97	0.11	1.26	.211	0.20	-0.12/0.52
	親	71	4.97	1.02	0.12	149			
横型集団主義	子	81	5.14	0.77	0.09	0.67*	.507*	0.10	-0.19/0.38*
	親	72	5.05	0.98	0.12	133.76*			

*は等分散性を仮定しない検定法による検定

表3 各利用尺度における日米比較（子世代と親世代を分けたデータを用いた分析）

3-1 子世代

	日米	度数 (N)	平均値 (M)	標準偏差 (SD)	平均値の標準偏差 (SE)	t値・自由度	有意確率 (両側)	平均値の差 (米-日)	差の95%信頼区間 (下限/上限)
縦型個人主義	日	46	4.08	0.85	0.12	2.17*	.034*	0.47	0.04/0.91*
	米	36	4.56	1.08	0.18	65.16*			
縦型集団主義	日	46	4.04	0.77	0.11	2.69	.009	0.52	0.13/0.90
	米	36	4.56	0.97	0.16	80			
横型個人主義	日	45	4.55	0.69	0.10	9.49	.000	1.42	1.12/1.72
	米	35	5.98	0.63	0.11	78			
横型集団主義	日	46	4.79	0.60	0.09	5.62	.000	0.82	0.53/1.11
	米	35	5.61	0.72	0.12	79			

*は等分散性を仮定しない検定法による検定

3-2 親世代

	日米	度数 (N)	平均値 (M)	標準偏差 (SD)	平均値の標準偏差 (SE)	t値・自由度	有意確率 (両側)	平均値の差 (米-日)	差の95%信頼区間 (下限/上限)
縦型個人主義	日	41	3.94	1.03	0.16	-0.38	.702	-0.10	-0.62/0.42
	米	31	3.84	1.19	0.21	70			
縦型集団主義	日	42	4.35	0.96	0.15	0.55	.582	0.13	-0.34/0.61
	米	31	4.48	1.06	0.19	71			
横型個人主義	日	41	4.40	0.75	0.12	7.23	.000	1.35	0.98/1.72
	米	30	5.75	0.81	0.15	69			
横型集団主義	日	41	4.40	0.65	0.10	10.01	.000	1.51	1.21/1.81
	米	31	5.91	0.62	0.11	70			

度においてアメリカの調査協力者の得点の方が日本のものより有意に高い結果となっていた。これは縦型個人主義については子世代・親世代をまとめて分析したときの結果とは異なっているが、むしろ「了解」されている当初の予想に沿う結果であるといえる。一方、親世代では縦型個人主義と縦型集団主義では有意な日米差が見られず、横型個人主義と横型集団主義においてのみ、アメリカの方が日本より高かった。横型個人主義と横型集団主義については子世代・親世代をまとめて分析したときと同様の結果であるが、縦型集団主義の結果は子世代・親世代をまとめて分析したときの結果と異なっている。(表3)

次に、国を分けて子世代と親世代との間を比較してみると、日本では横型集団主義で子世代の得点の方が親世代の得点よりも高かった以外は、子世代と親世代の間に有意差はみられなかった。一方、アメリカでは縦型個人主義の得点の子世代の方が親世代よりも高かった以外は、子世代の得点と親世代の得点に有意な差は見られなかった。(表4)

最後に、日米及び世代を独立変数とし、各利用尺度を従属変数として分散分析を行い、交互作用の有無を検証した。その結果、独立変数間の交互作用がみられたのは横型集団主義尺度のみであった。縦型個人主義尺度及び縦型集団主義尺度については残差部分が非常

表4 各利用尺度における世代間比較（日本とアメリカを分けたデータを用いた分析）

4-1 日本

	世代	度数 (N)	平均値 (M)	標準偏差 (SD)	平均値の標準偏差 (SE)	t値・自由度	有意確率 (両側)	平均値の差 (子-親)	差の95%信頼区間 (下限/上限)
縦型個人主義	子	46	4.08	0.85	0.12	0.70* 77.82*	.485*	0.14	-0.26/0.55*
	親	41	3.94	1.03	0.16				
縦型集団主義	子	46	4.04	0.77	0.11	-1.67 86	.099	-0.31	-0.68/0.06
	親	42	4.35	0.96	0.15				
横型個人主義	子	45	4.55	0.69	1.02	0.98 84	.331	0.15	-0.16/0.46
	親	41	4.40	0.75	0.12				
横型集団主義	子	46	4.79	0.60	0.09	2.927 85	.004	0.39	0.13/0.66
	親	41	4.40	0.65	0.10				

*は等分散性を仮定しない検定法による検定

4-2 アメリカ

	世代	度数 (N)	平均値 (M)	標準偏差 (SD)	平均値の標準偏差 (SE)	t値・自由度	有意確率 (両側)	平均値の差 (子-親)	差の95%信頼区間 (下限/上限)
縦型個人主義	子	36	4.56	1.08	0.18	2.59 65	.012	0.72	0.16/1.27
	親	31	3.84	1.19	0.21				
縦型集団主義	子	36	4.56	0.97	0.16	0.31 65	.757	0.08	-0.42/0.57
	親	31	4.48	1.06	0.19				
横型個人主義	子	35	5.97	0.63	0.11	1.25 63	.215	0.22	-0.13/0.58
	親	30	5.75	0.81	0.15				
横型集団主義	子	35	5.61	0.72	0.12	-1.81 64	.075	-0.30	-0.63/0.03
	親	31	5.91	0.61	0.11				

に多く、この4グループの得点のばらつきは日米差及び世代差からは説明できない理由に拠る部分が多いことを示唆しているとも考えられる。一方、裏を返せば、横型個人主義及び横型集団主義尺度のアメリカ人調査協力者の得点が著しく高かったことがこのような結果につながった可能性もあることが指摘できる。(表5)

IV. 考察

考察を述べるに先立ち、結果を解釈する上で考慮に入れる必要があると思われる問題点を指摘しておく。

今回の調査で一番問題なのはサンプル数であろう。統計的に正確な結論を導き出すには、一つのセルに30名程度というサンプル数は決して妥当であるとはいえない。従って今回得られた結果を解釈する際には、その点を念頭に置いておかなければならないと考える。

また、各利用尺度の信頼性も決して十分とはいえない。今回の分析では全員のデータを合わせて確定的因子分析を行った結果から各尺度の項目を決定したが、全員分のデータから算出された信頼度と、それぞれのグループのみのデータから算出された信頼度との差は予想以上に大きかった。確定的因子分析を行って該当すべき因子に入らない質問項目を削除したことで各尺

度の項目数が減ったことは事実であるが、これが原因で著しく信頼性が低くなってしまった尺度はそう多くない。むしろ、確定的因子分析を行った後の方が高い信頼性を得られた尺度もあったことを考えると、各尺度の論理的な妥当性を重視したこの方法をとったことが信頼度を下げる原因になったとは考えにくく、もとの尺度の信頼度が十分でなかったことの方が問題であろう。しかしながら、理由はともあれ、今回の日本の子世代グループの横型個人主義尺度の信頼度係数が極端に悪く、結果の解釈に困難をきたす恐れがあることは否定できない。従って、結果を考察する際には、この尺度の解釈を控えざるを得ないと判断した。更に、今回は仮説検定の帰無仮説の棄却域を5%に設定したが、行った検定の数が多く、厳密に言えばその面からのエラーが生じる可能性がある。従って、考察を進めていく際には、これらの点を考慮した上で解釈する必要があると考える。

まず、各尺度の得点に着目してみると、日本の親世代もアメリカの親世代も、最も低い得点だったのが縦型個人主義尺度の得点だったということは日米間の共通点として挙げられる。親世代で最も高い得点だったのはアメリカでは横型集団主義尺度であるが、日本では縦型集団主義尺度の得点と横型集団主義尺度の得点がほぼ等しい。また、アメリカの子世代では縦型個人主義尺度の得点が最も低く、縦型集団主義尺度の得点

表5 各尺度についての日米間・世代間による分散分析結果

5-1 縦型個人主義

利用 尺度 得点	日本			アメリカ			計		
	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)
子	4.08	46	0.85	4.56	36	1.08	4.29	82	0.98
親	3.94	41	1.03	3.84	31	1.19	3.90	72	1.09
計	4.01	87	0.93	4.22	67	1.18	4.11	154	1.05

		平方和 (SS)	自由度 (df)	平均平方 (MS)	F値	有意確率
主効果	日米	1.32	1	1.32	1.25	.265
	世代	6.96	1	6.96	6.63	.011
二次交互作用	日米×世代	3.11	1	3.11	2.96	.087
モデル		10.66	3	3.55	3.39	.020
残差		157.31	150	1.05		
合計		167.97	153	1.10		

5-2 縦型集団主義

利用 尺度 得点	日本			アメリカ			計		
	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)
子	4.04	46	0.77	4.56	36	0.97	4.27	82	0.90
親	4.35	42	0.96	4.48	31	1.06	4.41	73	1.00
計	4.19	88	0.88	4.53	67	1.01	4.34	155	0.95

		平方和 (SS)	自由度 (df)	平均平方 (MS)	F値	有意確率
主効果	日米	.99	1	3.99	4.58	.034
	世代	0.51	1	0.51	0.58	.446
二次交互作用	日米×世代	1.41	1	1.41	1.62	.205
モデル		6.45	3	2.15	2.47	.064
残差		131.47	151	0.87		
合計		137.92	154	0.90		

5-3 横型個人主義

利用 尺度 得点	日本			アメリカ			計		
	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)
子	4.55	45	0.69	5.97	35	0.63	5.17	80	0.97
親	4.40	41	0.75	5.75	30	0.81	4.97	71	1.02
計	4.48	86	0.72	5.87	65	0.72	5.08	151	1.00

		平方和 (SS)	自由度 (df)	平均平方 (MS)	F値	有意確率
主効果	日米	70.55	1	70.55	136.72	.000
	世代	1.30	1	1.30	2.52	.114
二次交互作用	日米×世代	0.05	1	0.05	0.10	.756
モデル		72.69	3	24.23	46.95	.000
残差		75.86	147	0.52		
合計		148.55	150	0.99		

次ページに続く

がそれに続いているが、日本の子世代でも最も得点が低かったのが縦型集団主義尺度であり、縦型個人主義尺度の得点も同じ位低かったことを考えれば、両者の傾向は似ていると言える。つまり、これらの価値観が各個人の中でどのような順序になっているかという点では、親世代同士・子世代同士で日米に共通の傾向が

あることが指摘できる。

一方、日米それぞれに分けて子世代と親世代の共通傾向の有無を探ってみると、日本では子世代・親世代共に縦型個人主義の得点が低く（子世代で一番得点が低かったのは縦型集団主義尺度だが、縦型個人主義尺度得点もそれに続いて低い）、横型集団主義の得点が

5-4 横型集団主義

利用 尺度 得点	日本			アメリカ			計		
	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)	平均値 (M)	度数 (N)	標準偏差 (SD)
子	4.79	46	0.60	5.61	35	0.72	5.14	81	0.77
親	4.40	41	0.65	5.91	31	0.61	5.05	72	0.98
計	4.61	87	0.65	5.75	66	0.68	5.10	153	0.87

		平方和 (SS)	自由度 (df)	平均平方 (MS)	F値	有意確率
主効果	日米	50.75	1	50.75	122.73	.000
	世代	0.08	1	0.08	0.19	.661
二次交互作用	日米×世代	4.46	1	4.46	10.78	.001
モデル		53.96	3	17.99	43.50	.000
残差		61.62	179	0.41		
合計		115.58	152	0.76		

高かった（子世代・親世代共にこの尺度の得点が最も高かった）といえる。一方アメリカでは、子世代・親世代共に、最も得点が低かったのが縦型個人主義尺度の得点であるという点で共通している（但し子世代は僅差で縦型集団主義尺度の得点が続いている）が、最も高い得点を得た尺度を見てみると、子世代では横型個人主義であるのに対し、親世代では横型集団主義であり、この点は異なっている。従って、世代間の違いについては若干の日米差があるといえる。

次に、それぞれの尺度について、更に日米間・世代間の差を検証してみる。

縦型個人主義については、日米間ではなく、世代間に統計的有意な差が見られたことに注目すべきだろう。更に詳しく見てみると、アメリカ人の子世代が他の3グループに比べて縦型個人主義尺度の得点が高く、そのことがアメリカの親子間及び子世代の日米間で有意差が見られる原因となっている。Singelis、Triandis、Bhawuk及びGelfand（1995）が縦型個人主義の代表としてアメリカを挙げたのは、このデータを見る限り、若い世代についてあてはまる傾向であるともいえるかもしれない。

縦型集団主義に関しては子世代の日米間でのみ統計的有意な差が出たが、注目すべきはその方向である。Singelis、Triandis、Bhawuk及びGelfand（1995）に日本は縦型集団主義社会であろうと述べてあったにも関わらず、4つのグループの中で最も縦型集団主義尺度の得点が高かったのはアメリカの子世代であり、逆に最も得点が低かったのが日本の子世代であった。このことはアメリカの大学生がむしろ日本の大学生よりも仲間意識が強い可能性があることを示唆するが、アメリカの大学ではカレッジ・スポーツなどが全学的な行事ともいえるくらいに人気を集めていることなどを考えると、あながち理解できなくもない。むしろ興味深いのは、その社会の価値観をより強く内在化させていると思われる親世代の間で日米差が出なかった点であろう。この点においては、少なくとも今回得られたデータに関しては、Singelis、Triandis、Bhawuk及び

Gelfand（1995）の指摘は当たっていなかったと言える。

横型個人主義に関しては、先にも述べたとおり、日本の子世代のデータから算出される信頼度係数が余りにも低いので、子世代の日米差に関しては考察を差し控えざるを得なかった。しかしながら、親世代ではアメリカの親の方が日本の親よりもこの尺度において遥かに高い得点を得ていることに鑑みて、個人主義／集団主義という側面だけに注目すれば「アメリカは個人主義的、日本は集団主義的」とされる「了解」に符合する結果であるといえる。また、アメリカの調査協力者が子世代・親世代共にこの尺度においてかなり高い得点を記録した（7点満点中子世代が5.97、親世代が5.75）ことを考え合わせると、この価値観は世代を問わずアメリカの社会で一般的に受け入れられているのではないかと考えられる。

ところが、横型集団主義に関しては、子世代・親世代共に、アメリカの調査協力者の方が日本の調査協力者よりはるかに高い得点を得たことが特筆される。特に親世代については、日本の親世代よりアメリカの親世代の方が、1.5点以上高い得点を得ているのである。これは、「アメリカ人は個人主義的、日本人は集団主義的」と言われてきた「了解」に真っ向から異を唱える結果である。また、日本の中でも、親世代より子世代の方が高い得点を得ていることにも注目したい。実は、4グループの中で、日本の親世代が最も横型集団主義尺度の得点が低いのである。なお、この尺度で日米差と世代差の交互作用が見られたのは、アメリカでは世代間に有意差が見られなかったのに対し、日本では親世代の得点の方が子世代の得点より有意に低かったためと思われる。

以上の結果を、どのように理解すべきだろうか。

一つの可能性としては、この調査が行われる10日程度前に起きた9.11の影響が考えられるのではないかとと思われる。1942年の真珠湾攻撃以来初めて、アメリカの国土が外国に攻められたという事実に対するショックは、やはり相当大きなものがあった可能性はあるだ

ろう。仲間意識、共同体意識、個人の利益ではなく集団の利益を優先させる、という価値観が、一時的にはあってもかなり強調されていたことが今回の結果に現れたと見ることもできるのではないかと思われる。このように考えると、分散分析を行った際に縦型の二つの尺度の残差部に比べて横型の二つの尺度の残差部分が遥かに少なかった理由も、当時の社会的な状況の下でアメリカ人調査協力者の横型個人主義及び横型集団主義の価値観が強くなり、そのせいでこの二つの尺度の得点が著しく高くなったと考えれば説明がつく。

この点に関しては、今後の再調査の結果を待つしかないだろう。9.11のような大きなインパクトを調査協力者に与えるような要因がないときに、再度同様の調査を行い、その結果検証してみればはじめて、逆に9.11がアメリカ人に与えたインパクトの強さが分かるのかもしれない。

もう一つの可能性は、「アメリカは個人主義的、日本は集団主義的」とされていた「了解」を見直す時期が来ているのではないかということである。この点に関しては他の研究でも徐々に指摘されはじめているし、特に大学生にはその傾向が強いのではないかという指摘もある (Triandis & Gelfand, 1998)。今回の結果で興味深いのは、日本では横型集団主義尺度で子世代の方が親世代よりも高い得点を得ているという点である。単に「集団主義」という側面だけに着目してこの結果を考えると、日本の子世代は親世代より保守化してきているのではないかとさえ思ってしまうのだが、ここでアメリカの子世代・親世代の方が更に高得点を得たことを併せて考えると、そもそも何が「保守化」なのを問い直す必要が出てくる。というのも、横型集団主義は、ここで取り上げた4つの価値観の中では最も人と人との関係を平等なものとして捉える価値観だからである。そのことを考えると、万人皆平等を建前とするアメリカ社会でこの価値観が受け入れられるのも分からなくはない。そして、日本の子世代が、親世代に比べて、そのような平等化の価値観をより強く持っているとしたら、これはむしろ、日本の子世代の保守化ではなく、日本社会がアメリカ化してきているという指摘に合致する結果なのではないかとも思える。つまり、横型集団主義の、「集団主義」の部分ではなく、「横型」の部分で、よりアメリカの価値観と近づいてきている可能性があるのではないかということである。

V. 今後の課題

先にも述べたとおり、今回の調査の大きな問題点は調査協力者の人数と各尺度の信頼度係数の低さであった。統計的な分析を行うためには、もっと多くの調査協力者のデータが必要であることは言うまでもない。また、より多くの調査協力者のデータを集めることにより、それぞれの尺度も安定してくるのではないかと考えられる。更に精度の高い結果を得るためには、是

非とも多くの調査協力者が必要である。

また、今回の調査では、調査協力者数の不足から、男女差の比較が全くできなかった。ただでさえ少ないデータ数を更に小さなセルに分けるわけにはいかなかったため、今回の分析に際しては男女を分けないまま通したが、今後の調査では日米差・世代差に加え、男女差も検証できれば興味深い結果が得られる可能性がある。

今回、日米間の差よりも世代間の差の方が強く出た尺度があったことは注目に値する。しかしながら、今回の結果では統計的に有意な世代差が見られた変数がアメリカと日本では異なっていた (世代差が見られたのはアメリカでは縦型個人主義尺度、日本では横型集団主義尺度だった) ことから、まだ「文化」の枠を跨いだ共通のサブカルチャーの存在 (例えば、様々な国の大学生に共通する傾向に基づいた「大学生文化」と呼べるようなもの) を主張するには至らなかった。この点に関しては今後更に研究を積み重ねる必要があるだろう。

今後更に多くの調査協力者からデータを集めることで、今回の結果が例外的なものなのか、それとも今まで長年「了解」されてきた「アメリカ人は個人主義的、日本人は集団主義的」という傾向自体が変わってきたのかどうかを確かめることは、意義のあることであると思われる。

注

- 1) この「了解」が成り立たない研究もあり、最近ではむしろ数が増しているようにも思われる (Gudykunst et al. (1996)、Kim et al. (1996)、Oetzel (1998) など)。
- 2) これらの訳語は守崎 (2000) に拠る。
- 3) 日本では中根・土居・濱口・石井などが独自の概念を提唱している (久米 2001)。
- 4) この日本語版「縦型／横型—個人主義／集団主義尺度」は筆者の博士論文執筆の際に使用したものである。
- 5) アメリカでアンケート調査を行ったのが9.11事件から10日前後しか経っていない時期だったため、事件が回答に影響する可能性があるかと判断した縦型個人主義尺度の中の2項目は質問項目から除いた。項目は尺度ごとにまとめてではなく、ばらばらの順序で配された。
- 6) 確定的因子分析を行う際には、全ての調査協力者のデータをまとめたまま分析した。
- 7) 因子モデルの当てはまりの良さを緩和するため、各尺度の項目の質のばらつきは不問とし、p値を.01で容認することとした。

引用文献

〈和文〉

- 久米昭元 (2001) 「対人関係の基礎概念」 石井敏・久米昭元・遠山淳 (編) 『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』〈第6章 対人関係中心の理論〉 有斐閣ブックス pp.73-75.
- 桜木俊行 (1997) 「個人主義と集団主義」 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔 (編)

付録 a 調査参加者の数・年齢・文化背景

a-1 人数

	日本				アメリカ				計			
	計	男	女	不明	計	男	女	不明	計	男	女	不明
子	47	15	31	1	36	10	26	0	83	25	57	1
親	42	16	25	1	33	7	24	2	75	23	49	3
計	89	31	56	2	69	17	50	2	158	48	106	4

a-2 年齢

	子			親	
	日本	アメリカ		日本	アメリカ
18~20	35	16	36~40		1
21~25	11	20	41~45	6	6
26~30	1		46~50	17	14
			51~55	18	9
			56~60	1	

a-3 文化背景

子			親		
日本	アメリカ		日本	アメリカ	
日本人 45	アフリカ系	2	日本人 41	アフリカ系	1
Japanese	African American		Japanese	African American	
その他 2	アジア系	2	その他 1	アジア系	1
	Asian American			Asian American	
	コーカソイド系	30		コーカソイド系	28
	Caucasian American			Caucasian American	
	ヒスパニック系	1		ヒスパニック系	1
	Hispanic American			Hispanic American	
	ネイティブ系	0		ネイティブ系	1
	Native American			Native American	
	その他	1		その他	0

付録 b 確定的因子分析の結果

b-1 縦型個人主義尺度利用項目

VI3	他の人が自分よりうまくやると、イライラしたりピリピリしたりする。	When another person does better than I do, I get tense and aroused.
VI4	競争がなければ良い社会はできない。	Without competition, it is not possible to have a good society.
VI5	他人よりうまく自分の仕事をやるのが重要である。	It is important that I do my job better than others.
VI6	他人との競争があるところで仕事をするのは好きだ。	I enjoy working in situations involving competitions with others.

因子モデルへの当てはまりの良さ (N=150 で設定) : $X^2=4.140$ $df=5$ $p=.529$

α : 全体=.61、日本子世代=.48、日本親世代=.66、アメリカ子世代=.63、アメリカ親世代=.65

(cf. 確定的因子分析前 (6項目) の信頼度係数 α' : 全体=.64、日本子世代=.57、日本親世代=.69、アメリカ子世代=.60、アメリカ親世代=.67)

次ページに続く

『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣選書 p.241.

西田ひろ子 (2000) 「はじめに」 西田ひろ子 (編) 『異文化間コミュニケーション入門』創元社 pp. iii-iv.

守崎誠一 (2000) 「価値観」 西田ひろ子 (編) 『異文化間コミュニケーション入門』創元社 pp.132-181.

〈欧文〉

Gudykunst, W. B., & Nishida, T. (1994). *Bridging Japanese/North American differences*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Gudykunst, W. B., Matsumoto, Y., Ting-Toomey, S., Nishida, T., Kim, K., & Heyman, S. (1996). The influence of cultural individualism-collectivism, self

construals, and individual values on communication styles across cultures. *Human Communication Research*, 22, 510-543.

Hofstede, G. (1983). Dimensions of national cultures in fifty countries and three regions. In J.B. Derogowski, et al. (Eds.), *Explications in cross-cultural psychology* (pp. 335-386). Lisse, Netherlands: Swets & Zeitinger.

Kim, M.-S., Hunter, J. E., Miyahara, A., Horvath, A.-M., Bresnahan, M. J., & Yoon, H.-J. (1996). Individual - vs. culture-level dimensions of individualism and collectivism: Effects on preferred conversational styles. *Communication Monographs*, 63, 29-49.

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self:

b-2 縦型集団主義尺度利用項目

VC1	自分が好きなことでも、もし家族から反対されたらあきらめる。	I would sacrifice an activity that I enjoy very much if my family did not approve of it.
VC2	家族が喜ぶことなら、やりたくなくてもする。	I would do what would please my family, even if I detested that activity.
VC3	大きな旅行に行く前には、家族の大部分の人や、友人の多くに相談する。	Before taking a major trip, I consult with most members of my family and many friends.
VC4	大抵、仲間の利益の為に自分の利益を犠牲にする。	I usually sacrifice my self-interest for the benefit of my group.
VC5	もし親が何か名誉な賞を受賞したら、子供はそのことを名誉に思うべきである。	Children should feel honored if their parents receive a distinguished award.

因子モデルへの当てはまりの良さ (N = 150 で設定) : $X^2 = 17.275$ df = 9 p = .045

α : 全体 = .53、日本子世代 = .46、日本親世代 = .67、アメリカ子世代 = .62、アメリカ親世代 = .53

(cf. 確定的因子分析前 (8項目) の信頼度係数 α' : 全体 = .48、日本子世代 = .39、日本親世代 = .68、アメリカ子世代 = .46、アメリカ親世代 = .41)

b-3 横型個人主義尺度利用項目

HI 1	普段、自分のしたいことをする。	I often "do my own thing".
HI 3	自分のプライバシーを保つのが好きだ。	I like my privacy.
HI 5	自分は独特な人間である。	I am a unique individual.
HI 7	自分の成功は大抵、自分の能力による。	When I succeed, it is usually because of my abilities.
HI 8	多くの面で、他人とは違う独自性をもっていることが好きだ。	I enjoy being unique and different from others in many ways.

因子モデルへの当てはまりの良さ (N = 150 で設定) : $X^2 = 13.261$ df = 9 p = .151

α : 全体 = .69、日本子世代 = .28、日本親世代 = .45、アメリカ子世代 = .70、アメリカ親世代 = .56

(cf. 確定的因子分析前 (8項目) の信頼度係数 α' : 全体 = .57、日本子世代 = .52、日本親世代 = .46、アメリカ子世代 = .73、アメリカ親世代 = .49)

b-4 横型集団主義尺度利用項目

HC 1	自分の同僚が幸せなことは、自分にとって大切なことである。	The well-being of my co-workers is important to me.
HC 2	もし同僚が賞をもらったら、自分も誇りに思う。	If a co-worker gets a prize, I would feel proud.
HC 4	仲間の和を保つことは自分にとって大切なことである。	It is important to me to maintain harmony within my group.
HC 5	ちょっとしたものをご近所と貸し借りするのが好きだ。	I like sharing little things with my neighbors.
HC 6	他人と協力すると気分がいい。	I feel good when I cooperate with others.
HC 8	自分にとっての楽しみとは、他人と共に時を過ごすことである。	To me, pleasure is spending time with others.

因子モデルへの当てはまりの良さ (N = 150 で設定) : $X^2 = 11.760$ df = 14 p = .626

α : 全体 = .67、日本子世代 = .45、日本親世代 = .39、アメリカ子世代 = .69、アメリカ親世代 = .42

(cf. 確定的因子分析前 (8項目) の信頼度係数 α' : 全体 = .67、日本子世代 = .37、日本親世代 = .51、アメリカ子世代 = .72、アメリカ親世代 = .27)

Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

Oetzel, J. G. (1998). Explaining individual communication process in homogeneous and heterogeneous groups through individualism-collectivism and self-construal. *Human Communication Research*, 25, 202-224.

Singelis, T. M., Triandis, H. C., Bhawuk, D. P. S., & Gelfand, M. J. (1995). Horizontal and vertical dimensions of individualism and collectivism: A theoretical and measurement refinement. *Cross-*

Cultural Research, 29, 240-275.

Triandis, H. C., & Gelfand, M. J. (1998). Converging measurement of horizontal and vertical individualism and collectivism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 118-128.

Triandis, H. C., Leung, K., Villareal, M. J., & Clack, F. L. (1985). Allocentric versus ideocentric tendencies: Convergent and discriminant validation. *Journal of Research in Personality*, 19, 395-415.

(平成16年11月13日受理)